

私中心デザインの実践

-現場に立って短歌を詠むことを通じて-

Hands-On “I” Centered Design

- Through Standing in the Field and Composing Tanka -

横溝賢¹, 平尾実唯²,

¹Ken Yokomizo, ²Miyui Hirao

¹札幌市立大学, ²株式会社ニトリパブリック

¹Sapporo City University, ²NITORI PUBLIC Co., Ltd.

k.yokomizo@scu.ac.jp

キーワード：短歌，生活世界，二人称的アプローチ，コミュニケーションデザイン

概要

人間中心を推奨するデザインでは、ユーザの問題を三人称的に捉えてコンセプトを作ることが推奨されている。私という自己を不在にしたままユーザを客体化して見ようとするアプローチには環世界の自覚が伴わず、デザイン行為に関係する当事者間に相互性が生まれにくい。そのように考えた筆者らは、短

歌を取り入れた私中心のデザイン実践を試みた。具体的には現場に向いて詠んだ短歌を題材にモバイルを制作し、モバイル歌会を通じた社会的なコミュニケーションをかたちづくる実践である。本稿では、一連の実践を省察することから、短歌がもたらす社会的なデザイン実践の知の在りどころを明らかにする。

1. はじめに

1. はじめに

近年、「いいね」のような共感の表明を通じて関係を取り持つ SNS コミュニケーションが大衆化している。Twitter は 150 字の言葉を綴る手軽な SNS ツールであるが、誰かの呟きに対する解釈と釈明のやりとりが行われ、共感を求めながらも、むしろ互いのわかり合えなさを露呈させている。このようなコミュニケーションはデザインの現場でも起きている。デザインにおいて問題解決の方向性をグループで協議する工程はコンセプトワークと呼ばれるが、そこでの対話は客体化されたユーザに関する言葉が中心となる。ユーザへの表層的な共感がかたちづくられるが、自己（以下、「私」と表記する）を中心に巻き取る環境（ひと・もの・こと）との相互性（横溝，2019）がかたちづくられることはない。なお本稿において相互性とは、差異を享受しながら関わりあう状態とする。この相互性が生まれにくい背景には、デザインプロセスに、「私」の生活世界を感得する体験（環世界）の欠如があると考えられる。芸術やデザインも本来は、「私」が生きる中で出会う事象から受ける喜びや苦しみ表現の問いとなるはずである。そのように考えた筆者らは、環世界をデザインに取り入れる実践を試みることにした。

2. 短歌について

共著者・平尾は高校時代から短歌を味わうことが好きで、趣味として親しんできた。短歌の面白さは、詠人の見ている世界と自己の解釈の差異を楽しむところにある。筆者らは、短歌のような言語表現をデザインプロセスに組み込むことによって、自他が感得している環世界を捉え直し、表現の道具として使いこなせる

ようになるかもしれないと考え、その可能性を探ることにした。そもそも短歌とは、57577 からなる 31 音の定型詩のことである。ものづくりに短歌を選択した理由は、情感を持ったまま世界を一旦切り取ることの出来る言語表現であると考えたからだ。

また、短歌の世界には歌会というつくった短歌をもち寄って批評し合う催しものがある。そこでは、作者の世界を借りて自分の見ている世界を語り合うことで、複眼的な解釈を知ることができる。

このことから、短歌には互いの見えをもちより、その差異を味わい合う知的活動が含まれており、おのおのが「私」の環世界を客体的に認知することから、表現の中心に「私」を自覚したものづくりを促す可能性があるのではないかと考えた。

3. デザインにおける言葉の意味の転回

産業化社会におけるデザインは、複合的な問題を解決できる方向性をコンセプトによって、概念化・言語化する。コンセプトとは制作過程においては、表現の方向性を明確にするための観点や着目点であり、完成後にはそのものの表現の背景を明確に説明するための概念である。コンセプトには、産業化社会の課題を背景にした市場や消費者の潜在的欲求に基づいた言葉が用いられる。徹底した「私」不在のコンセプトワークを経てデザインされた製品は、言葉のとおりデザインする「私」から切り離されて市場にリリースされる。ユーザもまた製品開発に関わった環境（ひと・もの・こと）に思いを馳せることもなく、古くなれば捨て、新製品に買い換える。不可逆的な環境破壊は「私」不在のデザインによって生み出されていると言っているだろう。一方本研究では、「私」が向き合う生活世界

との関わりを短歌として言葉にすることから、ものづくりを展開する。短歌を導入することによって、作り手が向き合った環境（ひと・もの・こと）に受け手が思いを馳せる可能性を探求する。そして作り手は受け手との共感を得ることを希求するのではなく、受け手（共同する他者も含む）との見かたや考えかたの差異を学びあうことを探求する。それによって「私」中心の言葉作り、ものづくりが、受け手とどのような間柄を形成したのかを観察する。

4. 研究方法

本研究は、下記2項目の態度と考え方で現場に出向いて実践研究をおこなう。

- 1) 実践の動きかた：人びとの語りを聴くことから関係性をかたちづくるナラティブ/リレーショナルアプローチ
- 2) 実践の捉えかた：実践を通じて関わる、個人・個物・現場という人間・非人間を二人称的に見立て、対象が何を見て、どう感じているかを洞察する二人称的アプローチ

5. 実践のプロセス

本研究ではまずは二人称的アプローチで現場をぶらぶらするところからものづくりを始める。そしてその場で短歌を詠み、歌会を行う。その後、その実践と経験を踏まえてモビールをつくり、他者を交えて鑑賞会をする。モビールは動く彫刻と呼ばれ、風と時間と空間の変化を受け入れて自らの形を変容させる性質がある。そのため、みる人、みる場所によって見え方が変わるモビールは短歌に相通じるものがあり、ひとが存在する空間で、ひとがそのものから感じ得ることができると考える。また、つくるひとがモビールづくり未経験者であっても、表現が難しくなく、誰にでもできるものづくりであると考えたため、モビールを選んだ。

6. 社会実践

北海道の洞爺湖をフィールドとして、2度（2021年8月28日/9月8日-14日）の実践をおこなった。1度目は半日かけて短歌を詠み、モビールをつくった

（付録A）。2度目の実践では、短歌を詠むフェーズまでを洞爺湖で実践し、後日モビールの制作した（図1）。また、この実践ではデザイン研究者の筆者・横溝と、デザイン専門家を志す共著者・平尾の二人で洞爺湖を歩いて短歌を詠み、その後の歌会では学芸員のMさんを交えておこなった。

ビジュアルデザインを専門とする横溝は短歌未経験者であった。これまで、フィールドワークにおいて絵を中心にして記録してきたが、短歌をつくるモードで歩いてみると、事象を別の物に見立て、換喩として言葉に表す方法で短歌を詠んでいた。たとえば湖畔の水辺にて緩やかな波に揺られる水鳥に出会ったとき、横溝は嘴からの流線的な造形を見て「フォークに見え



図1 洞爺湖ランプリング



図2 制作したモビール



図3 モビール鑑賞会「たゆうたう」

る」と述べていた。一方、平尾は波に揺られているという事象に対して瞬時に「〈びちびち〉の鳥は7文字か。でも〈べちべち〉という感じだな」と思考し、思いつくままに（絵ではなく）言葉を思い浮かべることを行なっていた。このように同じ事象に対峙する2人の思考には違いがあることを発見した。平尾はこの洞爺湖2度の実践を経て、短歌で詠んだことをモビールとして表現できるようになるために、20本のモビールをつくるスタディーを始めた（図2、付録A）。

また、洞爺湖実践ののちに、筆者の受け持つ札幌市立大学2021年度・学部1年生授業・情報リテラシー1にて短歌を取り入れ、歩いてみて感じた事象を言葉に表すことから、私中心のものづくりを展開するデザイン教育の実践を試みた。平尾の方は、現場を歩いて短歌を詠み、ものをつくる実践を何度も行なった。そうするうちに、平尾の表現思考に変化が現れた。それは身体性を伴いながら、短歌を詠めるようになっていたことである。以前までは57577のロジックをベースにした論理的な思考法で、短歌を考えていたが現場に立ってその場で詠むことで、事象-感情-言葉が身体化して湧いてくるようになった。（図4）。

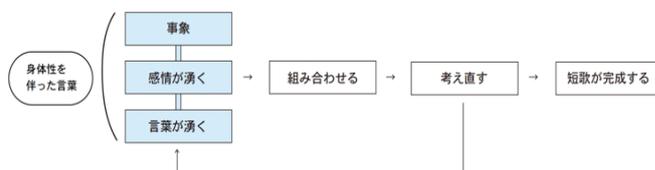


図4 身体的な思考方法のプロセス

そして短歌を詠むフィールドワーク実践と経験を踏まえて、制作したモビール20本を展示し、2021年12月2日に6名の学生を交えてモビール鑑賞会「たゆうたう」を開催した（図3、付録A）。学生との対話の中で受け手はモビールから現場に思いを馳せられるのか、どのような見かたの変化が起きるのか知る目的であった。この鑑賞会では、各々が最も好きなモビールについて、語ってもらった。鑑賞者は短歌とモビールの足りない情報を双方を鑑賞することで補い、そのものを介して、現場に思いを馳せたり、モビールの再解釈して自身の表現活動に繋げてみたりと各々の次のフェーズへと想像を膨らませることができた（図5）。

7. 結論

鑑賞者Hは、モビール歌会にて「このモビールから歌をつくれそうです。というかつくってみます。」と

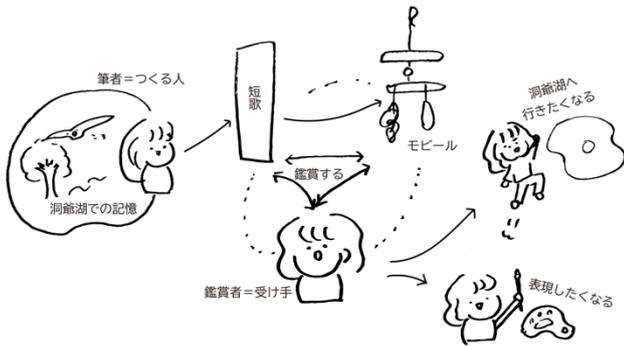


図5 鑑賞会での思考の変化

述べた。この言葉から、つくり手からものの意味が解放されると、つくり手と受け手は一人称-二人称-三人称の間を行き来できる身軽さを手に入れることができる。と考える。

本研究で行った実践プロセスを菊竹清訓の代謝建築論 -か・かた・かたち (菊竹, 1961) を参考にして視覚化してみると、図7ようになる (図6)。

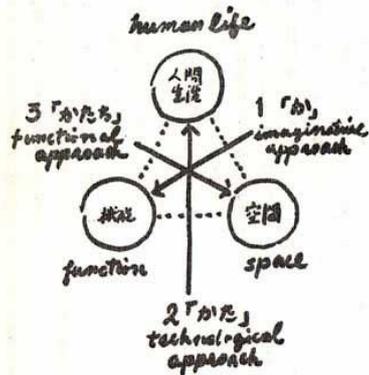


図6 菊竹清訓 かーかーかたち

つくり手は現場・生活世界に<こ>個として立ち囁く目をするところから言葉の断片を思い浮かべ、そこに対して<こと>事象をリズムや隠喩などの要素を加えて<ことば>感じたことを表せるように言葉の組み替えを行い、短歌をつくる。このように囁目していた私を<か>俯瞰する視点をもって想像することで、<かた>モバイルのかたちであるモチーフやはりを創造して<かたち>1つのモバイルをつくる。そのため、モバイルと短歌は意味をもち、つくり手のつくったものとして存在するようになる。

図7のような思考を、つくり手が巡らせることで、モバイル歌会では、受け手が一人称的に意味と事象に思考を巡らせ、つくり手のつくったものを見ることで現場に思いを馳せていた。そして、二人称的に意味と現場に思考を巡らせ、つくったものを見ることで想起される事象を導き、三人称的に事象と現場に思考を巡らせてつくったものを見ることで、つくり手の意味を捉えた。

このようにして、受け手がモバイル歌会の場で一人称-二人称-三人称を行き来しながら味わうことで短歌とモバイルはつくり手の意味から離れ、誰のものでもないものとして存在するように変化した。このような変

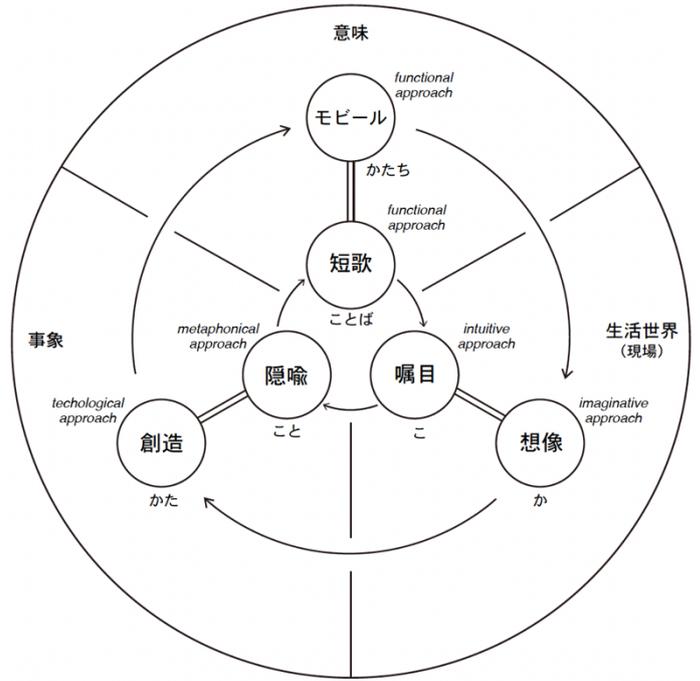


図7 私中心デザインの環世界 こーことーことば

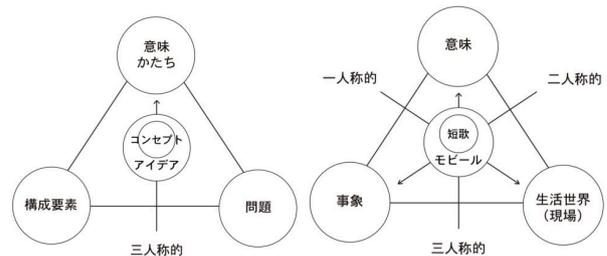


図8 コンセプト主体によって生まれる場

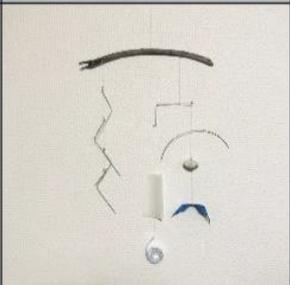
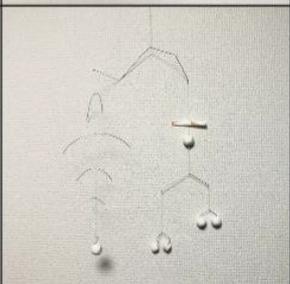
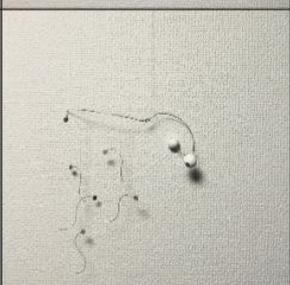
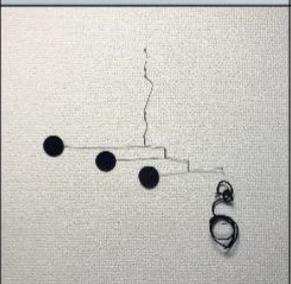
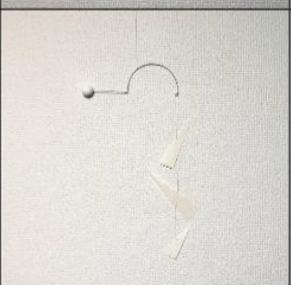
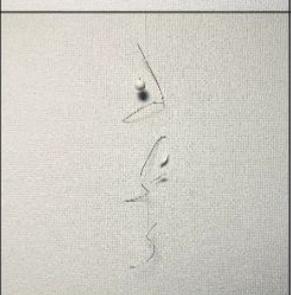
図9 短歌を用いることで生まれる場

化からこの人称間に行き来は、図8のような三人称的に構成要素と問題をみてアイデアやコンセプトからかたちづくるプロセスでは起こり得なかったことであると考えた。よって、言葉の中で短歌という道具はつくり手にとっては、現場の出来事を想起させながら一人称-二人称-三人称を行き来できることで、モバイルを身体性をもって具現化させるために役立つ道具である (図9)。また、受け手にとって短歌は、ものの意味を再構築、再解釈するための重要な手がかりとなり、ものの意味から解放されることによって、受け手自身の表現を解放させるきっかけになりうるものであることがわかった。

参考文献

東直子(2019) 短歌の詰め合わせ, アリス館
 菊竹清訓(2008) 代謝建築論—か・かた・かたち 彰国社

付録 A

1		<p>するとすると溶け込むように沈んでく ドーナツ型の湖の前</p>
2		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
3		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
4		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
5		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
6		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
7		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
8		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
9		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>
10		<p>湖上にはふんわりと浮く鳥がいる 柳が揺れる砂が飛び散る</p>